

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

No.26 (April 2014)

日本ギaskell協会ニュースレター

会長就任挨拶

日本ギaskell協会会長 鈴木 美津子
(東北大学名誉教授)

4年間にわたって意欲的にそして真摯に会長職をお務めくださった多比羅真理子先生から、日本ギaskell協会会長を引き継ぐことになりました。私はギaskell文学を愛することにかけては人後に落ちませんが、協会の運営にはほとんど携わってきておりません。正直に申しあげますと、はたしてこの重責を担うことができるのか、いささか心許ない気持ちがいたします。ともあれ、これから2年間、副会長の大島一彦先生、事務局長の市川千恵子先生、そして役員の先生がたのお力をお借りして、微力ながらなんとか会長の職務を務めてまいりたいと考えております。会員の皆様の暖かいご支援とご協力をお願い申し上げる次第です。

先日、ふと思い立って、『ニュースレター』や大会プログラムなどを繙いてみました。第1回大会(1989年)のプログラムや『ニュースレター』第1号(1989年4月)からは、新しい学会を立ち上げようとする清新な意気込みや熱意が伝わってきます。大会プログラムや『ニュースレター』の体裁の変遷からは、その時々にご担当だった役員の方々の工夫の跡が偲ばれます。用紙のサイズも、第17回大会まではB4とA4が混用され、第18回大会から2年間はA3が、第20回大会からA4に統一されております。官公庁の公式の用紙がA4になったことの影響でしょうか。おかげでファイルするのが楽になりました。『ニュースレター』は、第15号までは英国ギaskell協会の『ニュースレター』と同じ体裁の小冊子ですが、第16号は、サイズは同じですが製本はされず、第18号(2006年)から現在のA3を半分に折った形になっています。今日の形に落ち着くまでには様々な試行錯誤があったのだろうと漠然と推測してはありましたが、第2代会長鈴江璋子先生の巻頭言「日本ギaskell協会設立20周年を迎えて」(『ギaskell論集』第18号)を拝読し、経済的な側面でのご苦労を知りました。『ギaskell論集』、『ニュースレター』そして印刷物の体裁の変遷は、協会の奮闘の歴史と言っても過言ではないですね。

協会設立時の熱い思いと四半世紀の間培って来た伝統を忘れずに、しかしそれに安住することなく、協会のさらなる発展を目指していかなばならぬと覚悟を新たにしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

挨拶に代へて

日本ギaskell協会副会長 大島 一彦
(早稲田大学教授)

もう大分昔のことだが、或る日、勤務先の大先輩である守屋富生先生の研究室を訪ねたら、山脇百合子先生が見えてゐて、何か話をしてをられた。守屋先生は、ちやうどよかつた、と云つて、僕を山脇先生に紹介して下さい、一緒に山脇先生のお話を伺ふことになった。何でもエリザベス・ギaskellの協会を設立することになったとかで、守屋先生にも協力を求めてをられるのであつた。守屋先生は引受ける意嚮のやうで、よかつたら君もどう、小沼先生も協力なさるさうだから、と仰つた。

小沼丹先生は僕の恩師で、僕は学生時代に先生の許で『克蘭フォード』を読んだことがあり、先生がこの作品の

文体とユーモアを高く評価なさつてゐることは知つてゐた。しかし先生は作家で、学会方面にはあまり関心のないことも知つてゐたから、少し意外であつたが、山脇先生と小沼先生が学生時代に同級生だつたと云ふ話も聞いてゐたので、これは多分友情によるものであらうと思ひ、枯木も山の賑はひと云ふことで宜しければと断つて、僕も参加させて頂くことになつた。

その後、小沼先生は会合には一度も出席なさらず、何年か経つて会が順調に発展してゐるのを見届けたところで、多少纏つた協力金(義損金と仰有つたかも知れない)を納めて退会なさり、守屋先生も何年か会計監査をなさつたあと、本務校の停年とともに退会なさつた。お二人とも今は亡く、僕だけが相変わらず枯木のまま今日に至つてゐる。

ところがここへ来て副会長を引受けることになつた。枯木の身には荷が重いからと固辞したのだが、或る朝、鈴木美津子会長から電話があり、寝呆けた頭で対応してゐるうちにどうやら引受け(させられ)てしまつたらしい。東郷秀光元副会長に、妙なことになりました、と申し上げたら、何もしないで目立たないやうにしてゐるのが副会長の役割だと仰有る。どうやら枯木のままでゐればよいと云ふことのやうなので、それなら僕にも務まるかも知れないと、少し気持ちが楽になつた。

——と云ふやうな訳ですので、宜しく願ひ申し上げます。

因みに、小沼丹全集第四巻(未知谷)に「古い本」と「女子学生」と云ふ随筆が入つてゐます。前者は『克蘭フォード』について、後者は山脇先生について書かれたものです。

◆◆◆ 新刊紹介 (2013 年度) ◆◆◆ (掲載情報は 2014 年 2 月 15 日までに報告されたものである。)

鈴江璋子『表層と内在——スタインベックの「エデンの東」をポストモダンに開く』(南雲堂)

武井暁子、田中孝信(共編)、小池滋、武井暁子、閑田朋子、梅正行、田中孝信(共著)『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』(音羽書房鶴見書店)

新刊書の情報を編集委員の小田(yoda@tad.u-toyama.ac.jp)までお寄せ下さい。締切は 2015 年 3 月 15 日です。

第 25 回例会レポート

日 時：2013 年 6 月 1 日(土) 午後 2 時より

会 場：早稲田大学教育学部早稲田キャンパス 16 号館 701 教室

開会の辞：日本ギヤスケル協会会長 多比羅真理子(実践女子大学非常勤講師)

研究発表：司会 足立萬壽子(ノートルダム清心女子大学非常勤講師)

1. 「『メアリ・パートン』における救済について」

矢嶋瑠莉(日本女子大学大学院博士後期課程)

2. 「サブレ侯爵夫人とギヤスケル——サロン文化の変遷」

桐山恵子(和歌山大学准教授)

講 演：司会 鈴木美津子(東北大学大学院名誉教授)

「大衆などというものは存在しない」——レイモンド・ウィリアムズと産業小説」

川端康雄(日本女子大学教授)

閉会の辞：日本ギヤスケル協会事務局長 市川千恵子(茨城大学准教授)

2013 年 6 月 1 日(土)、第 25 回例会は多比羅真理子会長の「開会の辞」により開会した。続いて足立萬壽子氏の司会により矢嶋瑠莉氏および桐山恵子氏の研究発表が行われ、また鈴木美津子氏の司会により川端康雄氏の講演が行われた。当日の例会参加者は 31 名であった。

研究発表

1. 「『メアリ・パートン』における救済について」

矢嶋氏は、マンチェスター性病病院で 1850 年代に行われた売春婦の患者への療養プログラムに針仕事や洗濯等の

家事が組み込まれていたというJ・ウォーコウィッツの報告から、当時の人々は身体と精神は分離したものではないという考えのもと、墮落した女性たちの精神を改善することによって彼女たちの身体を改善させる、すなわち売春業から足を洗わせることが可能だと考えていたと推測する。それを踏まえて矢嶋氏は、ギaskellの *Mary Barton*、“The Well of Pen-Morfa”、“Bessy’s Troubles at Home”に登場する、fallen woman に墮ちそうな要素を具えているが墮ちなかった各ヒロインに注目し、墮落を免れた彼女たちの状況を分析する。その結果、*Mary Barton* のマーガレット、ジョウブ、アリス、“The Well of Pen-Morfa”のエレナと牧師、“Bessy’s Troubles at Home”のジェムと医師という各小説の脇役同士が互いに連携してヒロインの墮落した精神を矯正し、ヒロインの人間的成長を促し、身体の墮落を防いでいるとまとめた。

脇役による主人公への精神的道德教育が、当時社会問題化していた fallen woman 救済の一助となりうると読み取った矢嶋氏の発表は、ギaskell文学を理解する一方法を示しており、今後の研究が期待されるものであった。

2. 「サブレ侯爵夫人とギaskell —— サロン文化の変遷」

桐山氏は、“Company Manners”でサロン主催者であるサブレ侯爵夫人を賞賛し、パリのマダム・モール宅のサロンゲストであったギaskellが社交文化としてのサロンに関心を抱いていたことは間違いないと見る。そのサブレ侯爵夫人について桐山氏は、侯爵夫人のサロンはポール・ロワイヤル修道院内にあり、壁一枚で敬虔な神の世界と世俗的な社交世界が隣合わせであったことを指摘し、異質だと思われるような信仰生活とサロン会話が同じ建物内で行なわれていたのは、両者がかけ離れたものとは見なされないという暗黙の了解が存在していたためだと解説する。またギaskellがサロン経営においては「ジプシーのような機転の良さ」が大切だと述べているように、即興性が重要であるサロンでイギリス人が評判をとることは難しかったが、桐山氏は、ホレス・ウォルポールが巧みな会話でサロンの人気者となり、サロン主催者のデュファン夫人とは14年間文通し続けたことを示し、その背景には騎士道的恋愛精神があったと考察する。

桐山氏の発表は、ギaskellがサロンという場で人々と交友関係を築き、如何にしてそれを自身の作品に生かしたか、という視点からのギaskell研究に示唆を与えてくれるものであった。

講演：「大衆などというものは存在しない」—— レイモンド・ウィリアムズと産業小説」

レイモンド・ウィリアムズは『文化と社会』(1958)において、産業主義の進行によって古い社会的韌帯が壊れ、都市生活者は他者を「大衆(masses)」として見る誘惑にかられ、また「人びとを大衆として見る見方があるだけなのだ」と主張している。その主張を軸として川端氏は、『文化と社会』の中の「産業小説」の章で『メアリ・バートン』と『北と南』を取り上げ、「大衆」表象への批評を検証し、ウィリアムズの産業小説論を分析する。具体的には川端氏は、ウィリアムズはギaskell作品を読むにあたり、彼女が労働者階級の苦しみを強く描いている、言い換えれば彼女が作品の中で産業化の暗黒面に光を当て、人々の新しい意識の視点から抜け落ちてしまう社会状況を小説の中へと組み込んでいることに注目していること、さらに『メアリ・バートン』では労働者階級の家庭における日々の生活や苦しみという細部の描写が随所に描かれ、また『北と南』では外部の描写として労働者階級のストライキが描かれているなど、ギaskellの産業小説の特徴に注目していることを指摘する。

ギaskellの「社会小説」とウィリアムズの「民主主義」を題材とした小説論についての川端氏の講演は、大衆文化研究を行うにあたり、文学作品という縦糸と大衆文化という横糸との関係性を再検討するのに貴重で啓発的なものであった。

例会は市川千恵子新事務局長による「閉会の辞」により滞りなく終了した。参加者の方々のご協力、また準備の労をとってくださった会場校の木村晶子氏および実践女子大学の学生の方々に、心より感謝の意を表したい。

その後、校内にある「^{なんてい}楠亭」へ場所を移動し、懇親会が行われた。講演者の川端康雄先生や研究発表者の矢嶋氏や桐山氏を囲んで20名ほどが和やかな雰囲気の中、各自の近況報告やコース料理に驚きや喜びを表しながら楽しい時を過ごした。中でも最も参加者の興味を惹いたのが、最後に出てきたフルーツに入っていた「グアバ」である。皆が名前も知らず困惑した表情を浮かべながら味や感想を述べるというひと時は、忘れることのできないものであった。

なお本レポートの作成にあたっては、各発表者、講演者、司会者、特に足立萬壽子氏のご協力を得た。この場を借りて謝意を示したい。

(文責 大前義幸)

第 25 回大会レポート

日 時：平成 25 年 10 月 5 日（土）午後 1 時より

会 場：中央大学 駿河台記念館 510 号室

開会の辞：日本ギaskell協会会長 多比羅眞理子
(実践女子大学非常勤講師)

シンポジウム：

「Britain and Beyond — ギaskellと帝国」

司会・講師 玉井 史絵（同志社大学教授）

講師 志渡岡理恵（実践女子大学専任講師）

講師 加藤 匠（明治大学兼任講師）

講師 田村真奈美（豊橋技術科学大学准教授）

総 会：総合司会 事務局長 市川千恵子（茨城大学准教授）

講 演：「ミシズ・ギaskellの『クランファド』」

司会 石塚 裕子（神戸大学教授）

講師 山本 史郎（東京大学教授）

閉会の辞：日本ギaskell協会副会長 大野龍浩（熊本大学教授）



(撮影：大野龍浩)

シンポジウム 「Britain and Beyond — ギaskellと帝国」

本シンポジウムでは、ギaskellの作品を帝国の歴史というコンテキストのなかで再読することにより新たな解釈の可能性を探るとともに、海外の作家との交流にまで視野を広げてギaskellの影響についても考察した。

『シルヴィアの恋人たち』 — 個人の自由と帝国の秩序 —

『シルヴィアの恋人たち』は、登場人物が個としての自由を求めながらも、家族、村落共同体、国家、帝国というさまざまなレベルにおいて秩序を維持しようとする大きな力に阻まれ葛藤する姿を描いた物語である。「自由」はヴィクトリア時代を通じて個人と国家権力との緊張関係を生み出し、社会の安定を揺るがす危険性をはらんだ概念であった。本発表では、同時代の「自由」をめぐる言説のなかで小説を分析することにより、個人と帝国との関係性について考察した。ギaskellは強制的に戦場へと駆り立てられるモンクスヘヴンの住民たちの抵抗運動には同情を示しつつも、必ずしも抵抗を全面的に肯定しているわけではない。自由と抑圧の複雑な関係を描くことにより、個人の自由と帝国の秩序のバランスを保つ困難さを示唆しているといえよう。

(玉井史絵)

「カナダ移住 — 『メアリ・バートン』の結末が意味するもの —

本発表では、1848 年に出版されたギaskellの最初の長編小説『メアリ・バートン』をとりあげ、結末でヒロイン一家がカナダに移住する意味について考察した。「イギリスの現状小説」のひとつに数えられる本作品では、労使の対立が殺人という悲劇的な事件をうむまでにこじれ、作品全体が緊張感と悲愴感に満ちた重苦しい雰囲気包まれている。その最後にやわらかな光を射し込むラストシーンがカナダであるのは、イギリス国内では問題解決が不可能だったことを意味すると同時に、当時もっとも人気の高い移住先だったアメリカにすれば（カナダは 2 番目）、階級社会イギリスを捨て、共和主義のアメリカを選んだという印象を読者に与えてしまう恐れがあったからではないかと考えられる。アメリカほど共和主義色は強くないけれども、イギリスより階級意識の希薄な植民地、イギリスからさほど遠くなく、友人も気軽に訪れることが可能な場所、慎ましかで家庭的なイメージをもつ場所、それがカナダだったのではないだろうか。

(志渡岡理恵)

「大英帝国の影 ― 「女王陛下の戦争」とギaskell ―」

＜最初のメディア戦争＞たるクリミア戦争に興奮した人々は様々な形で反応した。兵士の英雄的行為を賛美し、時には過去の罪さえ贖いうる場としたチャールズ・キングスリー、兵士を悲惨な状況に追い込みながらも誰も責任をとろうとしない体制側を非難したディケンズをはじめ、当時の作家はそれぞれの形で戦争と対峙することを余儀なくされた。ギaskellは『北と南』を執筆する際、クリミアのことが頭から離れなかったとされる。しかしキングスリーやディケンズと国内の社会問題における関心を共有し、キングスリーやアン・サッカレー・リッチーがクリミア戦争を描く際に用いた看護行為を『ルース』で描きながらも、彼女はクリミア戦争を作品に取り込むことはなかった。その明確な理由については憶測の域を出ないが、自らの作品から戦争を切り離そうとしたギaskellの姿がここからは見えてくる。

(加藤匠)

「大西洋を越えて ― ギaskellとストウ ―」

『アンクル・トムの小屋』(1851-52)を書いたハリエット・ビーチャー・ストウ(1811-1896)はギaskellと同世代の作家であり、ギaskell作品を含む多くの英国小説を読んでいた。一方、『アンクル・トムの小屋』は英国では本国を上回るほどの人気を博し、ギaskellもほぼ確実に読んでいたであろう。ストウが小説という手段で反奴隷制を訴えたとき、そこには『メアリ・バートン』を始めとする英国の社会問題小説の影響があったと考えられる。また、ミドル・クラスのヒロインを中心に据えた『北と南』は、『アンクル・トムの小屋』同様、社会問題解決にいかに関与すべきかが盛んに議論されている中で書かれた。このように二人の作品を追って行くことで、この時代の英米文学の密接な関係が見えてくる。

(田村真奈美)

講演：「ミシズ・ギaskellの『クランフォード』」

山本氏はまず、翻訳者である野上豊一郎が漱石の弟子で、演劇を専門とする英文学者、また能研究家でもあり、戦後は法政大学の学長を務め、小説家野上彌生子の夫君であったと紹介された。以下、翻訳を科学的に解明しようとする、現代翻訳論研究の立場から、翻訳には formal equivalence と dynamic equivalence、つまり原作に忠実な逐語訳と、読者の理解と趣味を目標とする意識の二種類があり、野上は『翻訳論』の中で、自分なりの解釈は避け、直訳を擁護し、その理論に基づき意図的に逐語訳の翻訳を行ったのであり、決して訳が下手だから滑らかな日本語に変えられなかったわけではない、と指摘された。また後半では、逐語訳と意識の長短比較分析に、川端康成『雪国』の冒頭文を例に、その訳から窺える様々な解釈を紹介し、欧米文化が絶対ではないことが分かると結論づけられた。

(文責 石塚裕子)

日本ギaskell協会役員会報告

1 役員会報告

1) 平成 25 年第一回役員会 (6 月 1 日 (土)、12 時～13 時 45 分、於早稲田大学教育学部第 16 号館 713 教室)

①会計：平成 24 年度会計報告を市川事務局長より報告、平成 25 年度会計予算案を関口会計補佐より報告後、承認された。

②会則改正について：会則に「会長、副会長、役員の解任」の条項を加えるか否かについて審議の結果、その必要は認められないという結論に至り、総会において事務局より役員見解を報告することにした。また、「会長、副会長、役員の解任に関する条項」に関する会則の改正が必要か否かを、総会で投票により諮るものとなる。

③次期会長の選出について：現会長の任期満了に伴い、次期会長の選出方法をめぐり、他学会の規約も引証のうえ意見が交わされた結果、次期会長は従来通り役員会での選挙とし、副会長、事務局長および役員を現行通り、会長が指名することになった。(選挙方法についての確認事項：7 月中旬、役員に投票用紙を郵送。役員は役員の中から会長を選挙し、8 月中旬に返送、選挙管理委員と事務局長が開票。役員会は得票数の最も多く得た者を新会長候補として総会に推薦する。)

2) 平成 25 年度第二回役員会 (10 月 5 日 (土)、11 時～12 時 45 分、於中央大学駿河台記念館 560 教室)

①役員組織：平成 25 年第一回役員会での決定に基づき、役員間の新会長選挙 (平成 25 年 8 月 20 日開票) の結果を受けて、鈴木美津子氏を新会長候補として選出したことを確認し、鈴木氏から第 14 期着任予定の役員の紹介があった。役員会で承認後、午後の総会で新役員を推薦し、会員からの承認を得る運びとなる。13 期着任幹事、足立萬壽子氏、関田朋子氏から今期をもつての幹事退任が申し出され、承認された。平成 26 年度 4 月からの新役員、会長 鈴木美津子、副会長 大島一彦、事務局長 市川千恵子、幹事 (第 13 期、平成 24 年 4 月着任、平成 26 年 4 月再任) 関口章子、玉井史絵、(第 14 期、平成 26 年 4 月着任、芦澤久江、石塚裕子、大田美和、小田夕香理、杉村藍、波多野葉子、松岡光治、宮丸裕二)、会計監査 (平成 26 年 4 月着任、松村豊子、志渡岡理恵)

②『ギヤスケル論集』投稿規定：現行の規定では、「原稿はエリザベス・ギヤスケル、またはその周辺に関する研究とし、未発表のものに限る。ただし、口頭発表原稿を元にした場合には、その旨明記すれば、審査の対象とする。」「氏名は原稿には記載せず、ローマ字表記、略歴と共に、別紙で提出すること。」であるが、投稿原稿に口頭発表に関する記述があれば、査読の際、筆者が推定されてしまう、略歴の提出も不要であるとの意見が出され、審議の結果、事務局に送る「別紙」に口頭発表の旨と所属・職位を明記し、略歴の提出は不要となった。

③『ギヤスケル論集』掲載論文の抜刷：ホームページでの PDF 公開、国立国会図書館でのオンラインジャーナル化などの動きに鑑み、抜刷の必要性を再検討し、今後は抜刷印刷をやめ、執筆者には『論集』を 5 部と、PDF (印刷会社作成) を進呈する。

③その他：(1) ギヤスケル協会・会計報告書は書類のまま 2 期前まで (8 年間) 保管する。(2) 研究会は従来通り、継続する。

2 総会報告

①次期会長選出結果報告：平成 25 年第一回役員会での決定に基づき、役員間の新会長選挙の結果 (平成 25 年 8 月 20 日、多比羅眞理子会長、東郷秀光前副会長の立ち会いのもと、私学会館において開票)、鈴木美津子氏を次期会長候補として選出した。(なお、投票結果の詳細は以下の通りである。役員 13 名、有効票数 13 票、鈴木美津子氏 5 票、大野龍浩氏 4 票、木村晶子氏 3 票、白票 1 票。) 役員会は鈴木氏を次期会長として推薦し、承認された。

②会則に関する投票：平成 25 年第一回役員会での決定に基づき、(1) 今後の会長の選出方法として会員全員での選挙の実施の必要性、(2) 会長、副会長、役員の解任条項の必要性を投票によって諮った。投票結果は、以下の通りである。有効票数 32 (過半数 17 票)。(1) 必要 9 票、不要 21 票、白票 2 票、(2) 必要 6 票、不要 26 票。以上の結果により、(1) 会員全員からの会長選、(2) 会長、副会長、役員の解任条項ともに、不要とする票が過半数を超えたため、会長の選出方法と会則は現行通りとする結論にいたる。

③『ギヤスケル論集』投稿規定改定：提出する原稿には執筆者の特定が可能な口頭発表に関する情報を記載せず、別紙に書き添える。また、「略歴」の提出は不要とし、別紙に氏名と所属を明記する。従来の「抜刷」は廃止し、執筆者には『論集』5 部と PDF ファイルを進呈する。

(文責 市川千恵子)

平成 24 年度日本ガスケル協会会計報告（2012 年 4 月 1 日～ 2013 年 3 月 31 日）

PDF 版につき省略致しました

◆◆◆◆日本ギaskell協会 第26回例会の御案内◆◆◆◆

日 時：平成26年6月7日（土）午後2時から 会場：アルカディア市ヶ谷

研究発表 司会：大野 龍浩（熊本大学教授）

1. 「ギaskellの作品にみる医者 ― ヴィクトリア朝における医学の進歩」

遠藤 花子（日本赤十字看護大学非常勤講師）

2. 「ギaskellが描くブランウェルの死」

芦澤 久江（静岡英和学院大学短期大学部教授）

講演 司会：木村 晶子（早稲田大学教授）

「家庭小説の政治学―リチャードソンからギaskellまで」 大河内 昌（東北大学大学院教授）

閉会後、懇親会（アルカディア市ヶ谷 レストラン フォッセ）

◆◆日本ギaskell協会 第26回大会 予告◆◆

日 時：平成26年10月4日（土）午後1時から 会場：明治大学

シンポジウム：「ヴィクトリア朝小説における社会領域とジェンダー」（仮題）

司会・講師 宮丸 裕二（中央大学教授）

講師 大石 和欣（東京大学大学院准教授）

講師 倉田 賢一（中央大学助教）

講演：「ナショナル・アイデンティティの変遷 ― オースティンとフォースターのあいだで」

丹治 愛（法政大学教授）

◆◆◆ 研究会予定 ◆◆◆

平成26年度も短編を中心に読書・研究会を以下の通り開催いたします。奇数月の第二日曜日、午後2時より午後4時まで、会場は実践女子学園桜会館です。日時に変更がある場合は日本ギaskell協会HPに掲載しますので新着情報をご覧ください。

対象作品：平成26年 5月 "Cumberland Sheep-Shearers" (1853)

7月 "Morton Hall" (1853)

9月 "My French Master" (1853)

11月 "The Squire's Story" (1853) "The Scholar's Story" (1853)

平成27年 1月 "Company Manners" (1854)

3月 "An Accursed Race" (1855)

会 場：実践女子学園桜会館（東京都渋谷区東1-1-40 Tel: 03-3407-7459 Fax: 03-3499-0835）

JR 渋谷駅東口より徒歩7分。渋谷警察署、首都高速に沿って六本木通りの坂を上る。

一つ目の信号を渡り、住友不動産ビル脇の細い道を右折し右手の建物。

（多比羅真理子）

●●●●● 編集後記 ●●●●●

本号よりニューズレターの編集を担当させて頂くことになりました。右も左も分からないところからはじめましたが、多くの先生方にご支援頂きましたおかげで、無事に作業を終えることができました。鈴木美津子新会長と大島一彦副会長はじめ、ご多忙のところ原稿をお寄せ下さった全ての先生方に、この場をお借りいたしまして心より御礼申し上げます。また、企画の段階からの確なご助言を下された市川千恵子先生に感謝申し上げます。微力ながら精一杯務めてまいりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

（編集 小田夕香理）

発 行：日本ギaskell協会

〒310-8512

茨城県水戸市文京2-1-1

茨城大学人文学部

市川千恵子研究室

URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/gaskell/>

e-mail: secretariat@gaskell.jp

発行日：2014年4月1日